

元宮城県岩沼市長 井口 経明 氏ご講演の要旨  
『 東日本大震災 被災と復興、防災・減災の取組み 』

・2021年12月7日(火)午後2時、日本BPO協会主催「第12回新進経営者懇談会」にて。

■大震災直後、その日から被災対応を実行、まず市民へ情報提供

1978年に宮城県沖地震がありましたので、地震が発生することを想定して、市として補助金を設け耐震補強を進めていました。古くなった市庁舎も建て替えるなど、対策を講じていました。

平成23年3月11日 14:46 大地震が発生した時はちょうど県庁に着いた時でしたが、直ちに市役所に戻ることとし、発生から1時間後には着きました。そして、午後4時頃、大津波がやってきました。岩沼では全壊家屋は736戸でしたが、そのほとんどが津波による全壊(724戸)でした。

大津波で、東部(太平洋側)は壊滅的な被害を受けました。私は、その日から100日間、市役所に泊まり、被災対応を実行しました。

震災直後、まず、情報を知らせなければならない。FM岩沼で、その日、午後5時10分、最初の放送を行いました。市の東部、太平洋側の方は壊滅的打撃を受けていましたが、市の中部、西部の方にはそれが分からなかったので、まず、それを伝えました。延べ206回、リアルタイムに、直に市民に情報を提供しました。最初のうちは亡くなった人が何人など、被害状況しか伝えられませんでした。時間の経過とともに、「みんなで頑張ろう」とか、各地からの激励の手紙なども伝えました。また、水道はいつどこで試験通水、本番は何時から、など、生活に必要な具体的な情報を提供し、被災した市民の生活に役立てました。

■一日も早い自立を目指して、1週間後には緊急生活支援金、災害住宅手当を支給

大変な状況下、目指したのは一日でも早く自立してもらうこと。各地からの応援、支援は大変有難かったが、受動的に受けているばかりでは駄目で、早く自立することが大事と考え、1週間後には1世帯3万円の緊急生活支援金(現金給付)、月3万円の災害住宅手当(家賃補助)の支給を実施しました。

■命を守るため、集落・地区単位(コミュニティー単位)の避難、入居を実行

阪神淡路の大震災の時、私は岩沼市の社会福祉協議会の会長をしていて、ボランティアとして被災地支援に行きましたが、その時、瓦礫の中から命を救われた人で、自ら命を絶つ人が出てきたということに衝撃を受けました。折角つないだ命、何としても絶対、自ら命を絶つようなことはあってもらいたくない。どうしたら良いか、まず、身近に知っている人がいれば良いと考えました。

避難所への避難、仮設住宅への入居の折、平等だとして抽選を行うところは多くありましたが、一切抽選は行わず、集落・地区単位(コミュニティー)で避難、入居を行いました。

身近に知り合いがいれば、励まし合い、みんなで頑張ろうということになります。震災直後で、命を絶つ人は、岩沼だけはゼロでした。

避難者は最大 6,700 人、避難所は当初 26 ヲ所、1 日、2 日と経つ中で、避難所を 3 か所に集約（市民会館、中央公民館、総合体育館）、部屋は集落ごとに分けました。復興がどんどん進み、6 月 5 日には避難所は閉鎖し、仮設住宅に入居してもらいました。仮設住宅（384 戸）は、震災の日から 17 日後に着工、4 月 29 日から 6 月 4 日にかけて引渡しを行いました。最初の入居（集落）と最後の入居（集落）では 1 ヶ月の時間差がありましたが、一切苦情等はありませんでした。コミュニティー単位は、命を守る意味でも非常に良いということで進めました。

#### ■徹底的に住民の声を聴き集団移転先を決定、女性・若者も参画して「まちづくり」

太平洋側では 6 集落が壊滅的な被害を受けました。避難をして 1 ヶ月ほど経って、これからのことについて、その 6 地区代表者の方々と会議を 18 回行いました。また、その地区住民との懇談会を開催、住民個々の事情があることを踏まえ個別の面談調査も行い、意見や考え、事情などを徹底して聴きました。そうした中で、集団移転先は一番早く 11 月 2 日に決まりました。国の同意を得て、被災地では第 1 号の防災集団移転促進事業を進めることになりました。

これだけの被害を受けた状況下で、どのような「まちづくり」をすれば良いのか。数世帯単位の分散した移転ではなく、1 ヲ所に集まった移転、「まちづくり」を行えば、集会所、ショッピングセンター等々、生活を営むために必要なものは全て揃えられます。

具体的な「まちづくり」は「まちづくり検討委員会」を設け、被災した 6 集落（地区）代表者と、女性代表者、若者代表者に出してもらいました。女性、若者が入ることで、その意見が反映されたことは非常に良かったと思います。

また、避難所を担当する市の課は、半数以上が女性であったので、トイレの問題や避難物資の配分についても円滑に行うことができ良かったです。

#### ■千年先まで持続可能な「まちづくり」、21 世紀の知恵の遺産「千年希望の丘」

岩沼の目玉は、「千年希望の丘」。500 年、1000 年に一度くる大災害からどう守るのか。50 年、100 年に一度の災害に対応については、国に 7.2m の防潮堤を復元してもらいました。コンクリートは 50 年、100 年経つと朽ちてしまいます。津波は引き波で大きな被害を出します。物が引っ掛かり流されないよう広葉樹を植えた丘、津波のエネルギーを減衰させる「緑の防潮堤（約 10 km）」を整備しました。名は「千年希望の丘」と名付けました。

##### □犠牲者・被災者の思い出を千年先のために

この丘には、単なる土砂ではなく、いわゆる災害廃棄物、流された家の土台、思い出の品々などを使用しました。岩沼の人たちが千年先も安心していられるとすれば、犠牲者、被災者にとっても非常に良いと考えました。

国や県からは、災害廃棄物を使うことに対して、毒ガス発生や陥没の可能性があるととして、ストップがかかりました。そこで、植物生態学者の宮脇先生の指導の下、植樹祭を行い、全国から来てもらって、6 千本を植樹、実証実験を行いました。その後、国からも認められ、本格的に造ることとなりました。第 1 号丘は全国から約 4,500 人が参加して、

3万本の苗木を植樹しました。

□21世紀の人たちの知恵の遺産、岩沼モデル

特に、千年先まで子供たちが笑顔で暮らせる持続可能な「まち」をつくりたいと考えました。次の22世紀に、21世紀の人たちの知恵の遺産である岩沼モデルで日本、世界の防災に貢献できるのではないかと、この思いです。

地震は突然発生します。耐震化や津波への備え、50年、100年に1回の地震と500年、1000年に1回の地震、それぞれを考え、減災ということを基本に復興を進めていく必要があります。

■地震・津波に限定しない防災の備えが必要

日本は地震などで大変な状況ですが、災害で影響を受ける可能性のある人は、全国的にみたら、津波の被害者は少なく、むしろ、洪水、暴風雨の被害が大きい。いろんな災害が日本では起きています。防災対策は、地震、津波に限定しないで備える必要があります。

■「“健幸”先進都市」でありたい

最後に、幸福の「幸」という漢字の元の意味は「若死に」の逆、長生きの意味。健やかで幸せ、文字通り、そういう「まち」をつくれたら良いと思います。「“健幸”先進都市」でありたい。

以上